



「尻高人形」定期公演

人形芝居を伝承する古里

人形浄瑠璃は、三味線と情感豊かな物語に合わせて演じる人形芝居で、発祥は古く、日本を代表する伝統芸能です。高山村の人形浄瑠璃「尻高人形」は貴重な伝統文化として、村人の熱意と努力で継承されてきました。

尻高の人々が人形浄瑠璃を行うようになったのは幕末から明治の初めと伝えられており、明治期に「豊松座」が結成され、盛んに上演されてきました。豊松座の中心人物であった与平が他界すると徐々に衰退し、昭和8年（1933）に中之条の古物商に道具類が売られてしまいました。村人は売った金額の倍以上を出して買い戻し、「錦松会」と改名し復興しました。

尻高人形は高さ50センチほどの人形を一人で動かす「一人遣い」で全国でも珍しく、左手を人形の背中に差し込み、頭を支える心串で眉・目・口、右手で2本の「差し金」を使い、人形の両手を動かします。

戦争中も年間に4、5回は上演され、戦後は昭和29年にNHKテレビで取り上げられて関心が高まりました。現在は、「尻高人形錦松会」として、頭31体、衣装約200点を保有しており、11演目を上演することができま

す。昭和30年（1955）に県指定重要無形民俗文化財、昭和53年（1978）に国選無形民俗文化財に指定されました。



錦松会座長 関亜刀美さん(豊松伝吉)

「豊松座」現在の活動

尻高人形芝居の上演は、村の文化祭、敬老会・研修会のアトラクション、民俗芸能発表会などでの公演活動を行っています。

昭和52年（1977年）から毎年2月に、中之条町の「金幸（きんこう）」で定期的に上演していましたが、平成10年（1998年）、西地区に「常設舞台」を備えた多目的施設が完成したのを契機に、平成11年度からは、毎年11月23日に、そこで定期公演を行うようになりました。

特集 旅の浄瑠璃師が伝授した技 人形浄瑠璃「尻高人形」

時は幕末の頃。名古屋の人形芝居の一派「豊松流」の旅芸人・豊松伝三が大きな荷物を背負って尻高にやってきました。伝三は山田与平の家に泊まり、その晩、村の人々を集めて人形浄瑠璃を披露したといわれています。段々夫節に合わせて小さな人形が生命を持っているかのように演じている様子に村人は心を奪われ、一カ月もの間、熱心に人形の操り方を伝三に学びました。もともと尻高の人々は浄瑠璃で歌われる後太夫節を知っており、賞心は高かったので上達は早く、伝三にお願いで人形と衣装舞台一式を譲ってもらったのが、尻高人形芝居の始まりと伝えられています。伝三に由来するので別名「伝さん人形」とも呼ばれました。伝三が旅立った後も村人たちは練習を重ね、頼まれれば他村にも上演に出かけました。中でも一番若い与平は腕を上げ、明治19年（1886）に伝三から免許を与えられて「豊松伝次」と名乗り、村人とともに「豊松座」を結成しました。農閑期に人形芝居の稽古が始まると、みな、時間を忘れて働んだということです。

世代を超えてつながる高山の伝統

—高山小学校伝統芸能教室—

「伝統って何だろう？昔からあるもの？」。高山村では、子ども達が地域の伝統芸能「尻高人形」を毎年体験学習しています。

この伝統芸能教室は平成11年度から始まりました。子ども達は、錦松会の人たちから人形芝居の指導を受け、夏休み中にも練習し、10月には全校生徒の前で6年生が上演。伝統的な演目を本格的に演じ、子ども達は人形の動きで細やかな感情を表現できるまでに上達します。見ている下級生も、夢中になって舞台に見入り、時には涙を浮かべて人形芝居のすばらしさに心を動かしています。来場した村の人たちや村内の高齢者の人たち

も盛んな拍手を送り、交流を深めています。子ども達は11月に行われる錦松会の定期公演にも出演し、練習の成果を大舞台上で披露します。

伝統芸能教室を通じ、高山村の子ども達は低学年の時から尻高人形を身近に体験しています。「自分たちも尻高人形を大切にしたい。高山のよいところをつないでいきたい」と、彼らの心に、高山村を愛する気持ち、伝統文化を大切に伝えていきたいという気持ちがふくらみます。「尻高人形」は、村に暮らす人々の心が世代を超えてつながる大切な伝統文化として継承され、村の誇りとなっています。



高山小学校伝統芸能教室



「尻高人形」定期公演に出演



高山小学校伝統芸能教室